フォークナーの『響きと怒り』における黒人英語の完了形について

On the Perfective of Black English Which Appears in Faulkner's *The Sound and the Fury*

高橋　正

1. 序

W. A. Stewart (1967) や B. L. Bailey (1965) といった Creole 語の研究者たちによって，非標準的な黒人英語と米国南部の下層階級の白人が話す英語との本質的な差異が指摘されて以来，両者の方言的差異に関して，多くの意見が出されてきた。その中で，完了形 (Perfective form) が，非標準的な黒人英語と白人の標準英語との間で大きく違うことが明らかにされている。Marvin D. Loflin (*Reading in American Dialectology* p. 428) は，非標準黒人英語には，Perfective form である have+*en* が存在しないことを取り上げて，非標準黒人英語と標準英語との相違は，両者の深層構造が異なるからであると主張している。それに対して，最近になって，Chicago City Colleges の Robin Herndobler と Andrew Sledd (Black English —— Notes on the Auxiliary; *American Speech* vol. 51, p. 185) は，標準英語の完了形 (I have told her.) と非標準的な黒人英語の完了形 (I done told her.) の2つの型の完了形が存在し，さらに，(I've done told her.) という型も可能であることから，非標準的な黒人英語の完了形は，次のような句構造規則で説明できるとしている。Perf→have+*en*[do+*en*]. そして，黒人英語の場合，音声的過程，すなわち，Assimilation によって，have が脱落すると主張している。その証拠として，否定文になった場合，ain't [have not] が現れることをあげている。I ain't been had to get up that early for a long time. 同様の意見は，Traugott (1972) pp. 193-194 にも見いだされる。

深層構造における相違にせよ，表層的な相違にせよ，完了形において，have が脱落し，done が現れることは，非標準的な黒人英語の大きな特色の１つである。

この小論において，Faulkner の *The Sound and the Fury* の中に見いだされる黒人英語の完了形について論ずる。先に述べたように非標準的な黒人英語と，いわゆる標準英語の完了形は，大きく異なっており，Faulkner がこの両者を，彼の作品の中で，意図的に区別している様子がうかがえるからである。

2.　４つの完了形

Faulkner の *The Sound and the Fury* の黒人英語の完了形には，次の４つの型がある。

a)　have+*p.p.*　have が現れる標準的な用法（６例）

(1)　'Haven't seen you in three-four days,' (p. 92)

(2)　I've got strings out, right now. (p. 92)

(3)　'I've tried to treat all folks right.' (p. 93)

(4)　'I've had good friends.' (p. 93)

(5)　'I've knowed de Lawd to use cuiser tools dan dat,' (p. 260)

(6)　'I've seed de first en de last,' (p. 264)

ただし，この６例のうち(1)—(4)の例文は，北部に40年以上住んでいる Deacon という黒人の英語である。南部に住んでいる黒人が用いた have+*p.p.* の用法は，(5)と(6)の２例だけである。

完了形の have が，'a' に縮約された例文が２つある。

(7)　'Who could a broke hit, den?' (p. 245)

(8)　En ef I'd knowed of aihy one higher, we'd a been on hit instead. (p. 106)

b)　ϕ+*p.p.*　完了の have が脱落している用法（42例）

(9)　'What you done to him now.' (p. 57)

(10)　'That the way he been going on all day.' (p. 64)

(11) ... en now he gone fer de doctor. (p. 253)

(12) *All I got to do is say Ise here.* (p. 58)

(13) 'You been sick?' (p. 92)

c) done+*p.p.* 完了を示す done が用いられている用法 (22例)

(14) 'We done looked there.' (p. 11)

(15) *Miss Caddy done gone long ways away.* (p. 52)

(16) *I thought you done slipped back out doors.* (p. 70)

(17) 'I reckon Un'c Louis done caught mo possums than aihy man in dis country.' (p. 106)

(18) 'I done told you.' (p. 228)

この done+*p.p.* の用法について，J. L. Dillard (1972) は，近接完了 (Recent perfective) を示すと述べているが，Faulkner で用いられている用例に関して，(15)や(17)の例文が示すとおり必ずしも，近接完了を意味しない。

done の前に have が現れる例は，*The Sound and the Fury* の中の黒人英語には見られない。しかし，他の作品の中の白人英語には，いくつかの例がある。

(19) She'*s* done been let alone too damn much already! (*Hamlet*, p. 141)

(20) ... and finally gets it out how Ab *has* done sued him—" (*Hamlet*, p. 16)

d) is+*p.p.* 完了の have の代わりに is が用いられている用法。この is は，主語の人称単数複数に関係なく常に is である。(23例)

(21) 'Is you all seen anything of a quarter down here.' (p. 20)

(22) 'I is done it.' (p .23)

(23) 'Is they started the funeral yet.' (p. 36)

(24) 'Is dey one broke?' (p. 245)

(25) Is you got de ricklickshun en de blood of de Lamb? (p. 262)

is が，se と表記されている例がある。

(26) 'Ise seed de first en de last.' (p. 267)

完了の has か is か不明な例が1つある。

(27) 'How long's he been that way.' (p. 50)

次に，この4つの完了形について，いくつかの検討を加える。

3. 4つの形が，それぞれ，どのような種類の文に用いられているかを検討する。

a) have+*p.p.* (have の縮約形 'a' も含む)

肯定平叙文——6

否定疑問文——1

wh- 疑問文——1

計8例

b) ϕ+*p.p.*

肯定平叙文——28

否定平叙文——1

一般疑問文——1

wh- 疑問文——12

付加疑問文——0

計42例

標準的な用法の場合，否定文は完了の助動詞の後に not が置かれ，疑問文の場合，主語と助動詞とが転置される。しかし，Faulkner に現れた黒人英語の場合，have が脱落する（あるいは，存在しない）ために，否定文，疑問文を作るすべがなく，never による否定文と，文尾に？をつけただけの一般疑問文が，わずか1例ずつあるだけで，また，付加疑問文は1例もない。wh- 疑問文は，12例ある。これは，have がなくても疑問詞があるので，疑問文と推測できることが理由であると思われる。

c) done+*p.p.*

すべて肯定平叙文——22例

done+*p.p.* の用例が，すべて肯定文であるのは注目に値する。すなわち，序で述べたように，もし，黒人英語の完了形が，Perf→have+*en* [do+*en*] という構造をもっているとすれば，ain't [have not]+done+*p.p.* という型の否定文も可能であるからである。しかし *The Sound and the Fury* の黒人英語には，このような用例はない。下で述べるように，完了の否定文は，すべて ain't+*p.p.* の型をとっている。さらに，疑問文が1例もないのは，done の前に助動詞 have が存在しないことと，done が助動詞と同じ働きを担っていない（done+主語の転置ができない）ことを示していると思われる。

d） is+*p.p.*

肯定平叙文――2
一般疑問文――9
付加疑問文――7
応　　答――3
繰り返し　――2
計23例

b), c）の場合とは逆に，肯定平叙文の例が2つしかなく，あとはすべて，一般疑問文，付加疑問文，応答，繰り返しの例である。これら4種類の文は，いずれも完了の助動詞を必要とするのであるが，Faulkner は，have ではなく，is を用いてこれらの文を作っている。

完了形の否定文に関して，have+*p.p.* で否定疑問文が1例あり，また，ϕ+*p.p.* で never による否定文が1例あるが，その他はすべて ain't+*p.p.* によって完了の否定文は作られている。（62例）

(28) 'I ain't seen no ball.' (p. 22)

(29) *Ain't you done enough moaning and slobbering today....* (p. 70)

(30) I bet you ain't had a full night's sleep since you lef. (p. 180)

以上見てきたように，Faulkner は，8例の例外（内4例は，北部の黒人の英語）はあるものの，黒人英語の現在完了形には，have を用いておらず，完了の助動詞が必要な場合には，have ではなく，is を用いている。さらに，否

定文は ain't+*p.p.* の型になっているが，この ain't はしたがって，have not ではなく，is not と思われる。この点に関して，第5節でさらに詳しく検討する。

4. 次に，肯定文に多く現れる ϕ+*p.p.* と done+*p.p.* の2つの場合について，*p.p.* にどのような動詞形がくるのか検討する。

a) ϕ+*p.p.* の構造における *p.p.* の動詞形

done	13	gone	4
been	18	got to	6
seen	1		

計42例

b) done+*p.p.* の構造における *p.p.* の動詞形

went	1	caught	2
looked	2	got	1
gone	3	had	1
played	2	told	1
thought	1	skeered	1
built	1	et	1
stood	1	soaked	1
kilt	2	seed	1

計22例

以上見ても分かる通り，ϕ+*p.p.* の *p.p.* の動詞形は，語形から完了の意味を推測できる。それに対して，例外（gone の3例）はあるものの，done+*p.p.* の *p.p.* の動詞形は，もし done がなければ，完了時制か過去時制かの区別はできない。Faulkner は，完了形と過去形との混乱が起こらないように，ϕ+*p.p.* と done+*p.p.* の両者を使い分けているように思われる。

5. 第3節で述べた Faulkner の黒人英語の完了形は，have+*p.p.* ではなく，is+*p.p.* の形で現れることについて，さらに詳しく検討する。

a） ϕ+*p.p.* が否定文になった場合，ain't が現れる。

(31) 'What you done to him now.' (p. 56)

↓

(32) '*Ain't* done nothing to him.' (p. 56)

(33) 'I got to go to that show, Benjy or no Benjy.' (p. 57)

↓

(34) You *ain't* got to start bellering now. (p. 40)

(35) You been doing it all day. (p. 58)

↓

(36) 'I *ain't* been teasing him.' (p. 56)

b） 次の完了形の付加疑問文の例が示すように，この ain't は，have not ではなく，is not である。

(37) It *ain't* hurt none of you and yourn, *is it*. (p. 33)

(38) 'You *ain't* got no extra quarter, *is you*.' (p. 51)

(39) He *ain't* wore out the name he was born with yet, *is he*. (p. 58)

(40) He *ain't* kilt Miss Quentin, *is he*? (p. 254)

南部の白人の非標準的な完了用法の場合は，完了助動詞 have が現れる。*The Sound and the Fury* の中では見当たらないので，次の例文は，*The Hamlet* からである。

(41) "You *aint* heard yet when Flem will be back, *have you*?" (p. 260)

(42) "You all *aint* started catching them yet, *have you*?" (p. 299)

c） 完了の疑問文の場合，一般疑問文に is が現れ，wh-疑問文には is は現れない。これは，一般疑問文の場合に，主語と助動詞の転置が必要であるのに対して，wh-疑問文の場合，先に述べたように，疑問詞があるため，is がなくても疑問文と推測できることが原因と思われる。

一般疑問文

(43) *Is* you all found it yet. (p. 21)

(44) '*Is* you been projecking with his graveyard.' (p. 56)

(45) *Is* dat show come, Mr. Jason? (p. 225)

(46) *Is* they started yet. (p. 40)

wh-疑問文

(47) 'What trance you been in.' (p. 33)

(48) 'Whar Mr. Jason gone, mammy?' (p. 254)

(49) Whut you been up to dis evenin? (p. 226)

d) 応答，繰り返しのときに，is が現れる。この場合にも，助動詞が必要である。

(50) 'Ain't done nothing to him.' Luster said. 'He just started bellering.' 'Yes you *is*.' Dilsey said. 'You done something to him...' (p. 56)

(51) You ain't had to be out in the rain like I *is*. (p. 68)

(52) I seen the sign, and you *is* too. (p. 33)

(53) 'You ain't got nothing to do.' 'Yes, I *is*.' (p. 277)

e) is+*p.p.* の完了形について

The English Dialect Dictionary によると，be が have の代わりに用いられる方言的用法は，Rutland, Huntingdon, Norfolk などの地方で存在しており，次のような例文をあげている。

(54) I am been wonderful bad. — Rutland

(55) I am bought it. — Huntingdon

(56) I are done. — Norfolk

また，Curme は，*Syntax* (37. 3. d.) で，この用法はアメリカ方言にも存在すると述べており，Joel Chandler Harris の *Nights with Uncle Remus*, p. 55 から，次の用法をあげている。

(57) 'Is you seed any sign er (of) my gran'son dis mawnin?'

Dillard (1972) は，is を have の代わりに用いるのは，黒人英語の特徴であるとして，次の例文をあげている。(pp. 48-49)

(58) The hogs is all died.

(59) Is they gone there?

(60) I is seen him.

以上，見てきたように，完了の助動詞 have の代わりに be を用いる用法は，

イギリス，アメリカの方言に存在していることが分かる。おそらく，かつては，自動詞のみに限られていた完了の助動詞 be が，他動詞の場合にも使われるようになったものと思われる。

6. 結　論

Faulkner は，現在完了形における白人と黒人の英語を区別しようとして，黒人英語には，完了助動詞 have を用いず，その代わりに is を用いて表現しようとしている。しかし is は，主に，完了の助動詞が必要である場合のみに現れる。have を用いないことに関しては，序の中で述べたように，非標準的な黒人英語の完了形で，have が脱落するという事実と一致する。

have の代わりに is を用いる用法は，5. e) で見たとおり，いくつかの方言に存在しており，Faulkner が，それらの方言からこの用法を借用したのか，それとも小説の舞台となっている Mississippi 州北部の黒人英語の用法を反映したものかは，Mississippi 州の黒人英語の資料がないため，現在のところ，断言はできない。が，しかし，Dillard (1972) が，have の代わりに is を用いる用法を黒人英語の特徴であると指摘している点は注目に値する。おそらく，Faulkner は，完了形に関して，黒人の英語を忠実に再現しようとしたのではないかと思われる。そして，標準的な用法とかなり異なる黒人の完了形を用いるにあたって，文意が不明にならないように，また，完了形と過去形との混同が起こらないように，黒人英語の使い方を工夫している。Faulkner の黒人英語の完了形の用法は，作者の，言葉を現実に即してそのまま描写しようとする姿勢と，さらには，方言を用いた作品を，1つの文学作品として普遍性を持たせようとする意図とを，うかがい知ることのできる好例である。

Bibliography

Bailey, Beryl Loftman. "Towards a New Perspective in Negro English Dialectology," 1965, which appears in *Reading in American Dialectology*, pp. 421–427.

Curme, George O. *Syntax*. Tokyo. Maruzen. 1931.

Dillard, Joey Lee. *Black English*. Vintage Books Edition. New York. Random House. 1972.

English Dialect Dictionary, The. edited by Joseph Wright. Oxford University Press.

Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. Penguin Books. 1964.

Faulkner, William. *The Hamlet*. Vintage Books Edition. New York. Random House. 1940.

Herndobler, Robin and Sledd, Andrew. "Black Engish——Notes on the Auxiliary," *American Speech* Vol. 51, 1976, pp. 185-200.

Loflin, Marvin D. "On the Structure of the Verb in a Dialect of American Negro English," *Reading in American Dialectology*, pp. 428-443.

Reading in American Dialectology. edited by Harold B. Allen and Gray N. Underwood. New York. Meredith. 1971.

Stewart, William A. "Sociolinguistic Factors in the History of American Negro Dialects," 1967. *Reading in American Dialectology*, pp. 444-453.

Traugott, Elizabeth Closs. *A History of English Syntax*. New York. Holt, Rinehart and Winston. 1972.